

## 読者を面白がらせる力

木村 洋

いい論文とは何か。個人的な考え方を言えば、それはおののおのの専門領域（たとえば日本近代文学、日本中世美術史など）の発展にきちんと貢献しながら、同時に専門外の読者を面白がらせる力を持つ論文である。最近たまたま読んだ小島庸平の『サラ金の歴史』（中公新書、二〇二一年）や益田肇の『人びとのなかの冷戦世界』（岩波書店、二〇二一年）は、まさにそのような達成として筆者的心に刻まれている。

言いかえれば、専門外の読者を面白がらせる論文を生み出せない学問分野は、社会のなかで尊敬を勝ちとる機会を失い、衰亡の道を辿るしかない。だからこそ今の日本近代文学研究の様子を見ると、少し心配になる。狭い事柄（個別の文豪やその作品）にしか目を向けない、微視的な論文ばかりが目立つよう見えるからである。一方で何人かの学者たちは今、閉塞を破るべく、意欲的な論文を差し出している。

その一人が十重田裕一である。十重田の労作『横光利一と近代メディア』（岩波書店、二〇二一年）の美点は、出版資本、映画と文学の出会い、検閲、自筆原稿などの切り口によって文学研究の戦力を

高めようとする攻めの姿勢にある。あくまで事實を丹念に調べる方針、さらに難解ぶつたりせずに、癖のない端正な文で精度の高い分析を差し出す構えが光っている。これは横光論でありながら、昭和期情報環境論もある。まちがいなく近年もつとも水準が高い研究書の一つだろう。

専門外の読者を面白がらせる力を持つ点は、鈴木貴宇の『サラリーマン』の文化史（青弓社、二〇二二年）にもあてはまる。これは社会学風の文学研究の新たな達成を示している。一昔前の社会学風の文学研究（その多くは文化研究と呼ばれた）には、文学者を犯罪者のように仕立てて責め立てるものが多かつた。もはや鈴木の本はこの見飽きた説教口調をきっぱりと拒んでいる。山路愛山が近松門左衛門の淨瑠璃を「貞享文禄の社会史」と見なしたように『論史漫筆』（国民新聞）一八九四年一月三〇日）、文学作品は時代のざわめきを復元するための貴重な材料になる。サラリーマン史の復元を通じて鈴木が手堅く確かめるのは、この事実にほかならない。

約一二〇〇頁の大著、安藤宏の『太宰治論』（東京大学出版会、二〇二一年）が出た。たしかに一人の文豪の個々の作品をめぐる論文を並べて、一冊の本を作るという手つきそのものに新味があるわけではない。今やこれは日本近代文学研究でもっとも見慣れた本の作りかたである。しかしよく彫琢され、暗示に富んだ文と粘り強く事実を考証する体力、またこの作業を通じて辞書のよう分厚い本をまとめあげる構想力において、『太宰治論』は際立つている。この本は末永く太宰研究を導く光源になり続けるだろう。

野崎歎は今日においてもつとも上質の文を綴る文学研究者ではない。

いか。そんな思いを抑えがたい。野崎は井伏鱒二を論じる『水の匂いがするようだ』（集英社、二〇一八年）に引き続いて、大江健三郎を論じる『無垢の歌』（生きのびるブックス、二〇二二年）でも存分に作文の腕前を披露してくれた。その文は実に多情多感である。たとえば少年少女を描く大江の表現はこう論じられる。「そうなのだ。透明にして純。刊行から六〇年以上たってなお、古びておらず、手垢がついていない」。こうした楽しげな書きぶりが読者の心を喜ばせてくれる。学術雑誌に載るような硬で無表情な論文とはまったく違う文学の論じかたを、野崎の本は指示している。

サントリーライフ賞を受賞した邵丹の『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳』（松柏社、二〇二二年）は、藤本和子や伊藤典夫などのアメリカ文学の翻訳者の足跡を考える。この足跡が一九六〇～七〇年代の若者の生態やSF界やアメリカ文学界や村上春樹などの事柄と混ざり合う、一種の文化的な寄せ鍋が生き生きと再現される。文学研究にしか描けない歴史があることを、この本は激しく言い立てる。翻訳については川戸道昭の大著『幕末明治翻訳文学史』第一巻（国書刊行会、二〇二三年）も見逃せない。色鮮やかな数々の図版と丁寧で落ち着いた筆致によって、この本は明治の翻訳文学の豊かさを教えてくれる。

和田敦彦の『大東亜』の読書編成（ひつじ書房、二〇二二年）は太平洋戦争期の文化工作や本の流通に携わる組織や仕組みを解説する。文豪の作品を考えるというありきたりな発想を捨て去り、新たな問いを独力で作りあげようとする意気込みが頗もしい。出口智之編の『明治文学の彩り』（春陽堂、二〇二三年）は多くの明治の本

の挿絵によつて読者を楽しませる。巻末の出口の解説は挿絵という問題の大きさと深さを明快に解き明かしている。

須田千里の『風流線』の構想と森田思軒訳『大坂魁・ハウフ『隊商』』（『國語國文』二〇二一年一月）は泉鏡花の小説と思軒の翻訳などの影響関係を探る。配慮が行き届いた緻密な検討ぶりと情報密度の高さに胸打たれた。情報の凝集性は論文という言説のもたらす感動の中心的な部分を占めるようと思う。この論文は同じ著者の『鏡花文学第一の母胎』（『文学』二〇〇〇年一月）とともに、鏡花研究の水準をいつそ高く引きあげている。

凡庸の会の同人誌『文学+』第三号（二〇二三年七月）に載った、大正文学史などをめぐる三つの座談会が面白かった。文学史は権威的なのでよくないという意見（四八～四九頁の小谷英輔の発言の大意）がここで目に留まった。仮に文学史が権威的であるよう見えるとしても、それは日本文学研究という小さな村の話でしかないと思われる。

むしろ文学史に権威がなさすぎることをわれわれは嘆くべきではないか。実際、思想史や歴史学や政治学や社会学などの分野では、文学史はまるで存在しないかのように扱われている。たとえば山口輝臣ほか編『思想史講義 明治篇I』（ちくま新書、二〇二一年）において、文学史の無視は徹底している。もちろんその構えはまちがついているし、今の学界の相変らずの縦割りの体制、それと表裏をなす文学史への無関心を、筆者は少しでも変えたい。だからこそ専門外の読者を面白がらせる力を備えた先の十重田たちの本を、心強く教えてくれる。

# 日本文学

1

## 特集・誌面共同発表

2023年 VOL. 72  
日本文学協会編集・刊行

### 特集・誌面共同発表

#### 「文学教育」の場について考える

——現代文・古典文学・「文学ジャムセッション」—— 金井景子・紅野謙介・2  
高橋大助・小澤純・吉井美弥子・小森潔・嶋田龍司・魚地愛葉

大場黎亜・遠山大樹・八木澤宗弘・柿原和宏・宮村真紀

依存する文学——あるいは可能性としての抵抗—— 伊豆原潤星・杉浦楓太・37  
杉山雄大・山口幹太・山口直孝

子午線 研究文献目録についての悩み ..... 伊豆原潤星  
読む 芥川文学の一人称複数〈僕等〉を読む ..... 牧野淳司・60  
——「海のほとり」の〈僕〉と〈M〉を基点に—— 小澤純・62

### 書評

和田明美著 「古代日本語と万葉集の表象」 ..... 倉住薰・68  
三宅宏幸著 「馬琴研究——読本の生成と周縁」 ..... 中尾和昇・70  
高木伸幸著 「井上靖の文学——一途で烈しい生の探求」 ..... 劉東波・72  
山根由美恵著 「村上春樹〈物語〉の行方」 ..... 石田仁志・74  
サバルタン・イグザイル・トラウマ」 ..... 木村洋信・76

### 学界時評

読者を面白がらせる力 ..... 木村洋信・76  
実践という「現実」を物語る国語科の教師たち ..... 笠井正信・78  
今月号掲載の論文要旨 ..... 59 67 82

### 新刊紹介